The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ものをつくることを書く、ものをつくるひとを書く ー幸田露伴についてー
Author(s)	吉田, 大輔
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76315
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（吉田大輔）	
論文題名	ものをつくることを書く、ものをつくるひとを書く ――幸田露伴について――

論文内容の要旨

幸田露伴（1867＝慶應3～1947＝昭和22）は、文章を発表し続けた期間の長さ、書いた分量の多さ、文体・ジャンル・内容の多様性、それらと不可分な学識の豊かさ、このようないずれの観点から考えても、近代日本の文学者のなかで特異な存在感を示している。生涯の長さ、遺した文章の膨大な量、興味の拡散性、そして彼のある種の文章が持つ難解さのせいで、露伴の研究はけして盛んとは言いがたい。

本論の着眼は、露伴が一貫して展開した主題のひとつを「ものをつくることを書く、ものをつくる人を書く」ことにあったと捉える点にある。そのうえで、いくつかの露伴の文章を起点とし、周辺状況や系譜まで含めた具体的な分析を行い、その文章の多様にして多層的なありようの一端を、人工物の即物性・現前性と遡行性という観点から考察することを本論の目的とする。「ものをつくることを書く」「ものをつくるひとを書く」という枠の大きな言い方は、美術や職人技、産業、技術、発明、創意工夫といった問題を包括するための用語として、選択した。

人間がなにかをつくりだすこと、あるいは、なにかをつくりだした人間そのものに露伴が強い興味を抱き続けていたことは、これまでも一定の注意をひいてきた。事実、露伴の文章をみていくと、なんらかのものをつくりだした人や、なんらかのものをつくることそのものが、さまざまなニュアンスで繰り返し語られていることに気づく。

本論文は、「ものをつくることを書く、ものをつくることを書く」という観点から、露伴の文章が持つ人工物への即物性・現前性ならびに遡行性の問題をめぐって、四章にわたって、議論を行った。

まず、第一章「彫像を書く」は二節構成とし、第一節では、露伴の初期作品から「風流佛」（1889）を取り上げ、そこに見られる「動き出す彫像」の物語としての特徴を、歌舞伎「京人形」やギリシャ神話のピュグマリオンといった「動き出す彫像物語」の先例と対比させ、それがどのように新しかったのかを考察した。「動き出す画像・彫像」をめぐる物語は、芸術家伝説（クリス＆クルツ）の典型だが、これらの先行する主題の物語と対比させてみると、「風流佛」は、制作物の現前性が制作者を苦しめる展開や、彫像が動くことがなんらかの解決と読める余地を残しつつも必ずしもそう描かれていない点に、特徴や革新性が見出せた。

第一章「彫像を書く」第二節では、引き続き、「風流佛」周辺の明治期の「技芸家小説」（キュンストレルロマアネ、芸術家小説）の文脈を議論の俎上にのせた。こうした文脈で理解された露伴「風流佛」は、樋口一葉「うもれ木」、正岡子規「月の都」（ともに1892）などへ与えた伝播性・模倣喚起性がこれまでも注目されてきたが、内田魯庵の翻訳「彫像師」（1896）（Hugh Conway, ‘The Story of the Sculptor’）なども、「風流佛」評価の文脈からその動機を解釈しうることを議論した。

一節のみで構成した第二章「陶器を書く」では、露伴の小品「太郎坊」（1899）を取り上げ、その陶器描写をテクスト分析した。ここでは、小説作品のなかで露伴が陶器をどのように描いているのかを本文の分析を通じて行い、人間の過去の恋愛の記憶がひとつの小さな盃という物質の現前性とともに存在し、その盃が文章のうえで生命感を得る過程と、破損することの意味を考えた。そこでは盃という陶器とともに記憶が存在し、その破損と同時に記憶がはじめて語られはじめるが、盃の名前（太郎坊）をめぐる挿話が作品のなかで重要な機能を果たすことに着目した。また、室生犀星「陶古の女人」と対比させることで、「女性としての陶器」（陶古の女人）と「女性の記憶としての陶器」（太郎坊）の差異を考えた。

第三章「進歩を書く」は、三節構成とし、露伴の少年文学から、「文明の庫」（1898）「鉄の物語」（1909）「御手製未来記」（1911）といった露伴の陽性な一面のうかがえる文章を取り上げた。第一節では、変則的な操作ながら、坂口安吾の随筆「ラムネ氏のこと」（1941）を主に置き、「ラムネ氏のこと」から露伴「文明の庫」を分析する展開をとった。あるものをつくりだし、文明史を豊かにした人物の固有名をめぐって、このふたつの文章が鮮やかな対比を見せることを論じた。

第三章第二節では、これまでほとんどかえりみられなかった露伴の少年文学「鉄の物語」を取り上げ、不明とさ

れてきたその初出を調査によって発見したことや、その英語典拠を具体的に指摘し、露伴の実学的なものを喜ぶ一面を検討するとともに、その英語文献利用の一端を実証した。

第三章第三節は、引き続き露伴の少年文学から「御手製未来記」を取り上げた。作中で述べられる豊富な未来の実業アイディアは、掲載誌『実業少年』の他記事と関連するように露伴が書いていることを、具体的な雑誌調査にもとづいて検討した。露伴は、「御手製未来記」でサミュエル・スマイルズの伝記を発想源としていると推測できる「読書会」「番茶会」を設定したうえで、『実業少年』の他記事とひびきあうように豊富な実業アイディアを語り、それは、読むことと行動することをめぐる明るいメタメッセージとして当時の読者に受け取られただろうと分析した。

終章となる第四章「創意工夫を書く」は、一節のみで構成し、「幻談」（一九三八）を取り上げ、「幻談」前半におかれたウィンパー『アルプス登攀記』をもとにした再話と、後半の釣絲・釣竿をめぐる話とが、「ひも状のものがはりつめ、切れる」という出来事の反復として接続され、「段々細」の描写によって切断の意味が反転するさま、また、水死者から得る釣竿を語る後半部が類話とは異なり、死者の創意工夫をほどこされた事物として登場し、そこから遡行的に人物の姿が作品のなかにあらわれてくる点に特に注目して議論した。

以上の具体的な分析を通じて、ものをつくることを書く、ものをつくることを書く」という観点から、露伴の文章が持つ人工物への即物性・現前性ならびに遡行性の問題を検討した。

（原稿紙換算で約440枚）

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　吉田大輔　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	橋本順光
	副 査	大阪大学　教授	中直一
	副 査	東京大学　准教授	出口智之

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　ものをつくることを書く、ものをつくるひとを書く―幸田露伴について―

学位申請者　吉田大輔

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　橋本順光

副査　大阪大学教授　中直一

副査　東京大学准教授　出口智之

【論文内容の要旨】

本論文は、幸田露伴が参照したと考えられる多様な文献と露伴の作品とを比較することで、そこに「人工物への即物性・現前性ならびに遡行性」が一貫して見られるということを指摘しようとするものである。そうした「もの」への露伴の関心とその系譜の重要性が、先行研究では十分に考究されてこなかったとして、序論で論文の課題が設定されている。

第一章第一節は「風流仏」(1889)をとりあげている。『本朝廿四孝』と比較しながら、彫像が動き出すという京人形やピュグマリオンなどの主題の系譜と、西欧で発達した技芸家小説(芸術家小説)の系譜を参照することで、制作物の現前性が葛藤や解決に収斂されない点が「風流仏」のもつ新しさであると指摘している。続く第一章第二節は、技芸家小説の代表作となった「風流仏」が、内田魯庵が「彫像師」(1896)を翻訳する動機となった可能性を考察する。

第二章は、「太郎坊」(1899)をとりあげ、その陶器描写に注目している。過去の恋愛の記憶が盃とともに現前し、生命感を得る過程と同時に、破損と太郎坊という盃の命名の意味が考察される。

第三章第一節は、事物の発明と改良の歴史に注目している。露伴の「文明の庫」(1898)にみる考察が、鴎外の「サフラン」(1914)と対比する形で、坂口安吾の「ラムネ氏のこと」(1941)に受け継がれていると主張している。

第三章第二節は、露伴の少年向け読み物として知られる「鉄の物語」(1909)をとりあげ、鉄に関する百科事典的な記述が、多く John Yeats の著作(1887)に基づくことを指摘している。

第三章第三説は、同じく少年向けの「御手製未来記」(1911)をとりあげている。その豊富な実業に関するアイディアが、スマイルズの『西国立志篇』(1858・翻訳は 1878)の気風を受け継ぎつつ、掲載誌『実業少年』の記事と関係していることを論じている。

第四章は「幻談」(1938)をとりあげている。前半で語られるウィンパーの『アルプス登攀記』に基づく再話と水死者から釣竿を手に入れる後半とが、ひも状のものがはりつめて切れるという意味で接続していることを指摘している。

結論では、これらの具体的な作品分析から、露伴が一貫してものをつくることとものをつくるひとを書いており、「人工物への即物性・現前性ならびに遡行性」として要約している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、上記の全4章、それに序論と結論を加え、全体で縦書き2段組95ページ、本文と脚注を含め400字詰め換算で約500枚に相当する。このうち4つの章が、査読を経て紀要と学会誌に掲載された3本の論文と査読なしの紀要に掲載された1本を初出としている。

膨大な露伴作品のなかで、これまでほとんど論じられてこなかった作品を含め丹念に初出誌にあたり、参照した可能性のある文献を博捜することで典拠を明らかにし、独創性を考察した点は高く評価された。「風流仏」における『本朝廿四孝』や「幻談」における『アルプス登攀記』について、直接、原典にあたることで作品分析を導き出している点、とりわけ後者のひもの切断という点で破格に見える作品に一貫した構造を見いだす点は、そのもっとも成功した例といえるだろう。露伴といえば名匠ものとみなされがちななか、露伴の明治から昭和までの長くかつ多様な執筆活動に、ものをつくることとものをつくるひとという主題が繰り返し登場しているという指摘は新鮮で、十分な説得力をもっている。

ただし、それぞれの章の粗密が目立ち、重点が散らばっていることは指摘せざるを得ない。第三章第一節は、本文でも「変則的」と断っているように、坂口安吾の「ラムネ氏のこと」が初出論文のまま依然として中心にあり、後代への影響が唐突として論じられることで論として切断される感を強く抱かせる。

「太郎坊」、「鉄の物語」、「御手製未来記」の分析も、指摘にとどまっており、十分に展開されていないのも惜しまれた。例えば「太郎坊」と「幻談」は、ともにものが二つの時空をつなぐ点で共通しているにもかかわらず見落とされていることが副査から指摘された。初出論文の改稿についても、冒頭や末尾に発表後の知見が付記されるのみであり、これらは具体的に本論に組み込み、課題を明確にすべきであっただろう。例えば「鉄の物語」がYeatsだけを典拠にしていることでないことは明らかであり、限定したうえで鉄への関心がどのように展開されるのか論じるべきであったかもしれない。このような本文分析の不足ゆえ、これらの作品から「人工物への即物性・現前性ならびに遡行性」として要約できるかどうかについては複数の疑問が寄せられた。

このような問題があるにしても、露伴の作品群を「もの」の点から注目する視点は新鮮であることに変わりなく、従来、等閑視されてきた先行する作品と原典との比較や『実業少年』との関連などの指摘は十分な説得力をもっており、今後の調査と分析には高い期待が寄せられた。以上のことを鑑み、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。